

江戸時代の事件簿

天下泰平の世を謳歌した江戸時代ですが、幕府を揺るがし世間に大きな影響を与えた事件が何度か起こっています。日本カトリックの一大中心地であった島原という土地柄と、極度の圧政から起こった島原の乱、將軍権力の空白期に起こった牢人の反乱事件である慶安事件、忠臣蔵として知られる赤穂事件、大奥の勢力争いに幕閣の政争が絡んだといわれる絵島・生島事件、島原の乱以降約 200 年にわたり続いた、太平の世を打ち破る大塩平八郎の乱、これら 5 つの事件をとりあげて、事件に係わる本を展示いたしました。

[資料リスト](#)

島原の乱

江戸時代の初期に島原藩松倉勝家領の肥前国島原と、唐津藩寺沢堅高領の肥後国天草の農民が連帯して、益田（天草）四郎時貞を盟主に蜂起し、島原の原城に立て籠もって幕府・諸藩兵と戦い、一揆勢が全滅した農民一揆です。

時期 寛永 14 年（1637）10 月～寛永 15 年（1638）2 月 29 日。

場所 島原藩領の肥前国島原、唐津藩領の肥後国天草。

島原藩 ①有馬家 4 万石、外様、藩主：晴信一直純、慶長 5 年（1600）～慶長 17 年（1614）、居城：日野江城、原城（慶長 4 年修築か）。②松倉家 4 万石、外様、藩主：重政一勝家、元和 2 年（1616）～寛永 15 年（1638）、居城：島原城（元和 2 年築城開始）。以降の藩主略。

唐津藩 ①寺沢家 8 万 3 千石、外様、慶長 5 年（1600）肥後国天草郡約 4 万石を加増され 12 万 3 千石、藩主：広高一堅高。文禄 2 年（1593）～正保 4 年（1647）、居城：唐津城、天草支配のため富岡城を慶長 7 年（1602）から同 10 年（1605）に築きました。以降の藩主略。

土地柄 島原や天草地方は耕地が少なく、漁業・対外貿易・出稼など東シナ海への依存度が高い土地柄でした。また、島原地域は有馬晴信時代には日本カトリックの一大中心地で、その子直純の転封時にも同地に留まり、帰農する武士が多かったといえます。キリシタン弾圧に際し多くの殉教者を出しながら、多くは寛永初年（1624）頃までに棄教し転びキリシタンになったといえます。

一揆の原因 島原藩では元和 2 年（1616）に入部した松倉重政が、有馬氏の日野江・原の両城を廃して、7 年をかけ分不相応と云われた島原城を築いています。また、表高 4 万石のところ、数度の検地を実施して 10 万石の草高として領民から年貢を取り立てました。幕府に対しても 10 万石の軍役を負担し、取り立ては領民の生活が成り立たないほどの過酷なものでした。あらゆる生産物や生活手段に課税し、取り立ての厳しさは言語に絶したといえます。また、重政、勝家時代のキリシタン（カソリック教徒）の弾圧は峻厳を極めました。

一揆の経過 寛永 14 年（1637）10 月 25 日頃、島原南部の有馬地方で農民が代官を殺害して一斉に蜂起しました。次々に寺社を焼き、10 月 27 日には城下に放火して島原城を襲って、

一揆は藩領全域に拡大しました。この一揆の契機は10日ほど前から実施されたキリシタン弾圧とも、過酷な年貢の取り立てともいわれます。

天草でも寛永14年(1637)10月27日頃から益田(天草)四郎の出身地大矢野島を中心に蜂起し、応援の島原勢と合流した一揆勢3~4,000人は、11月14日本渡でおよそ1,500人の藩兵を率いた富岡城代三宅藤兵衛重利を敗死させ、ほぼ天草全域を一揆に巻き込みました。一揆勢は11月19日から4日間にわたり富岡城(熊本県天草郡岑岡町)を攻撃しましたが、本丸を攻略することはできませんでした。

一揆の質的変換 一揆勢の富岡城撤退を境に、天草ではキリシタンになることを強制された「新キリシタン」の村々は一揆の戦列から離れ、島原でも西部・北部では庄屋が一揆から切り離されると藩側に付く村が現れました。その後、天草の一揆継続勢は海を渡り、島原の一揆勢と合流して有馬晴信が築城した原城に立て籠もりました。この段階で一揆は個別領主に対する在郷の一揆から、将軍権力との対決となり、宗門一揆へと質的な転換をしています。

幕府の対応 幕府は宗門一揆と規定し、参府中であった両藩主を帰領させました。上使として板倉重昌を派遣し、佐賀・久留米・柳川・島原藩兵を付け、天草には熊本藩兵をあてることとしました。上使・諸藩兵の島原到着は12月5日で、島原と天草の一揆継続派の籠る原城を包囲しました。籠城者数は『稿本原城耶蘇乱記』に27,754人とあります。

鎮圧軍は12月10日以降、原城の攻撃を開始しました。寛永14年(1637)12月20日に上使の板倉は、天草丸・三之丸の攻撃を行いました。板倉は同15年(1638)元旦に諸大名の鎮圧軍を指揮して原城を再び総攻撃しましたが、多くの戦死者・負傷者を出して大敗し、自身は戦死しました。

代って松平信綱が指揮を執り、九州の大名を大動員し12万を超える軍勢が陸と海から原城を包囲しました。信綱はオランダ船に依頼して海からも原城を砲撃させています。細川忠利が、信綱に「攻めよと言われれば、我ら熊本勢だけで攻め落とします。外国船の手を借りるのは日本の恥辱です」と批判しましたが、信綱は「一揆勢は南蛮から援軍が来るといっているが、その南蛮船から攻撃されることが彼らに一番の衝撃を与えるのだ」と反論しました。

寛永15年(1638)2月28日、29日の総攻撃で原城は落城、益田(天草)四郎は熊本藩によって討ち取られ乱は鎮圧されました。

一揆の影響 松倉勝家は改易され、後に斬首となりました。また、寺沢堅高は天草郡を収公され、のち正保4年(1647)に自害し、寺沢家は無嗣断絶となりました。一方、松平信綱は加増され彼を中心に幕閣機構が確立されるとともに、公儀権力の威信が高まりました。また、キリスト教邪教感が決定的になり、キリシタン探索が本格的に開始されました。寛永16年(1639)にはこの乱を理由にポルトガルとの貿易を断絶し、鎖国が完成したとされます。

慶安事件 -由比正雪の乱-

慶安4年(1651)7月に露見し、未発に終わった由比正雪をはじめ丸橋忠弥・加藤市郎右衛門・金井半兵衛らを主謀者とする牢人の反乱事件です。この反乱計画には御三家の一つ紀州徳川頼宣の名前が利用されたため、事件後に幕府から頼宣に謀叛の嫌疑がかけられ物議をか

もしました。

時期 慶安 4 年（1651）7 月～9 月

社会背景 慶安 4 年 4 月 3 代将軍家光が没し、家綱が 11 歳で 4 代将軍を継ぎます。この頃幕府の改易・減封によって大量の牢人が生み出されていました。太平の世のため牢人は仕官の道も閉ざされ、困窮し不満が高じていました。また、同年 7 月親藩の三河国刈谷藩主松平定政が、上書して幕政を批判し改易されました。こうした社会情勢を好機到来とみた由比正雪は牢人とともに反乱を企てました。この反乱計画に荷担した牢人は 1,500 人ともそれ以上ともいいます。

反乱計画 由比正雪は駿河に赴いて久能山を襲い金銀を奪取し、その後駿府城を占領して、将軍を擁立して天下に号令しようとしてしました。江戸では丸橋忠弥が指揮者となり、一隊は幕府の小石川の煙硝蔵と江戸市中に火を放ち、他の一隊は江戸城内に侵入して、将軍を奪い正雪が拠る駿河国久能山へ急行する手筈でした。また、事件を聞いて登城する老中を討ち取り、譜代大名の屋敷に火薬を投じて乱入するなどの行動を計画していました。京都では加藤市郎右衛門らが二条城を乗っ取り、大坂では金井半兵衛らが市中を焼き討ちし、諸大名の米蔵にある米穀を奪取して大坂城に立て籠もるという計画でした。

事件の経過 慶安 4 年 7 月 22 日に正雪が江戸を出立しますが、7 月 23 日夜数人の訴人によって計画が露見しました。同日夜丸橋忠弥らの一味が町奉行所に逮捕されます。事件を知った幕府は新番頭駒井親昌を急使として駿府に派遣し、親昌は正雪を追い越して 7 月 25 日午後、先に駿府に到着します。すぐさま駿府城代大久保忠成配下の役人が搜索し、駿府茶町（静岡市）の梅屋太郎左衛門方に 7 月 25 日夜到着した正雪一行を発見し、親昌や駿府町奉行の与力などが宿を取り囲みました。正雪らは逃れ得ぬことを悟って正雪以下 8 人が自刃し 2 人が逮捕されました。7 月 29 日には一味 57 人が逮捕され、7 月 30 日には駿府で正雪の首が獄門にかけられました。8 月 10 日に江戸品川で丸橋忠弥ら 30 余人が処刑され、8 月 13 日に金井半兵衛が大坂天王寺で自刃しました。9 月 18 日には正雪の父母・妻・兄弟らが駿府で処刑され、これを最後に事件は落着をみました。

事件の目的 従来から諸説がありますが、現在は栗田元次の牢人救済説（『総合日本史大系』江戸時代上）が最も妥当なものとされています。

事件の影響 事件後幕府は牢人の再仕官の斡旋に積極的に乗り出し、大名・旗本の 50 歳以内の者に末期養子を許可し、牢人発生の原因である改易・減封の方針を緩めました。その後寛文 3 年（1663）には当主が 17 歳以下でも養子を認め、天和 3 年（1783）には 50 歳以上の者でも吟味の上で養子を認めることとしました。この結果、大名・旗本の改易・減封は激減しました。この事件は、牢人問題の処理のみでなく、武断から文治へと幕府の政治が転換する端緒となった事件でもあります。

由比正雪 江戸時代前期の牢人軍学者。新井白石が「駿河の由井の紺屋の子と申し候」（『白石先生手簡』）と記し、また、駿府の宮ヶ崎（静岡市葵区）あたりに両親や知合いが多く住んでいたことから駿府出生説が有力です。なお、父は岡村弥右衛門といい弟や伯父なども岡村姓であるので本姓は岡村氏と思われます。やがて江戸に出て軍学を講じるようになり、旗本や大名家中の武士にも講じたといわれます。

丸橋忠弥 かつて加賀前田家中に奉公し、のち牢人し江戸に住み十文字槍の師匠をしたといわれます。

赤穂事件－忠臣蔵－

元禄 14 年（1701）3 月 14 日、播磨国赤穂藩主の浅野内匠頭長矩が、高家の吉良上野介義央に江戸城松之廊下で刃傷に及びました。幕府は浅野に切腹を命じ、浅野家を御家断絶に処しました。しかし、翌 15 年（1702）12 月 14 日、旧臣大石内蔵助をはじめとする四十七士が吉良邸に討ち入って吉良の首級をあげ、主君の敵討ちに成功しました。そして、元禄 16 年（1703）2 月 4 日、幕府から四十七士に切腹の沙汰が下りました。

赤穂事件をモデルとした作品は、早くも元禄 16 年 2 月 16 日に江戸中村座で歌舞伎『曙曾我夜討』が上演されました。その後、寛延元年（1748）に浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』などが評判となってからは、この事件を「忠臣蔵」と呼ぶことも多くなりました。

赤穂浅野家 広島浅野家の分家、正保 2 年（1645）7 月浅野長直が常陸国笠間から入りました。高 5 万 3,500 石余に塩田約 5,000 石を持ち、長直は従来の屋敷構えを城に改築しました。長直の孫である長矩は寛文 7 年（1667）に生まれ、延宝 3 年（1675）に藩を継ぎました。長矩は天和 3 年（1683）に勅使接待役を勤め、元禄 14 年（1701）に再びこの役を命じられ、同年 3 月 14 日勅使登城の最後の日に、江戸城中で刃傷事件を起こし改易されました。

吉良上野介 寛永 18 年（1641）足利一族の名門である吉良義冬の子に生まれ、寛文 8 年（1668）家督を継ぎました。祖父義弥以来の高家として京都・日光・伊勢などに使節を勤めるほか、京都公卿の参府の接待を勤めるなど儀典の職にあたりました。また、知行地である三河国幡豆郡吉良地方の統治に力を入れ、知行地の農民からは名君と慕われています。元禄 14 年（1701）3 月、勅使接待中に浅野長矩に斬り付けられ、同年 9 月には高家を辞し、屋敷が呉服橋門内から本所一ツ目に移りました。同年 12 月には隠居しています。元禄 15 年 12 月 15 日早暁、浅野長矩旧臣の襲撃を受け殺害されました。62 歳でした。

事件の経過 勅使下向は毎年年頭の恒例行事で、まず幕府から將軍代理が京に上り、勅使が答礼に下ることになっていました。そして、元禄期は華美な生活様式が、社会のあらゆる面に行き渡り、勅使の接待に伴う儀式も複雑・美麗を極めていました。元禄 14 年（1701）は吉良が將軍代理として上京し、2 月末に江戸へ戻りました。吉良はこの時高家筆頭の立場であったため、権威を持ち前例にこだわらず浅野らを指導したといわれ、このことが浅野を逆上させたと考えられます。

刃傷の原因 直接の原因は推測域を出ませんが①突然逆上説、②神経衰弱的急性精神病症説、③吉良の浅野夫人への恋慕説など古来より諸説があります。しかし、最近では浅野長矩の気性や体調に理由を求める傾向が強くなってきました。浅野は元来癩癪持ちであったといわれ、そこに勅使饗応役という大任を勤めることで、肉体的にも精神的にも、疲れが溜まっていたとみられます。

事件の裁断 浅野と吉良には目付の事情聴取が行われ、その結果、浅野は吉良を一方向的に斬りつけたのであり、両者の間に事前に喧嘩はなく、喧嘩両成敗は適用されないと認定され

ました。そして、吉良をお構え無しとし、浅野には即日田村右京大夫家へ御預け・切腹、御家断絶、城地返上という裁断が下りました。これは將軍綱吉の意向として側用人の柳沢吉保から伝えられました。

吉良邸襲撃 江戸でも赤穂でも浪人となった旧赤穂藩家臣団の意見は分裂し、①再就職希望派、②直矩弟の大学擁立派、③吉良を討って主君の恥をそそごうとする人々に分かれました。家臣団は元禄15年(1702)2月京都山科の大石宅に集まり、長矩の一周忌後もなおしばらく慎重に大学による再興を待つという説に落ち着きました。その後、江戸急進派に賛成する家臣が増え、吉良を討って主君の恥をそそごうとする機運が高まった同年7月、大学は閉門を解かれて広島浅野家へ御預けになりました。しかし、同月京都の円山で行われた会議では、吉良邸を襲撃し主君の恥をそそぐという結論になりました。

同士は元禄15年10月～11月にかけて江戸に結集し、結集した47人は同年12月14日～15日早暁に吉良邸を襲撃して吉良を討ちました(足軽寺坂は途中姿を消す)。12月15日の朝、泉岳寺の浅野の墓前に吉良の首を供え、夕刻46人は細川家・毛利家・松平久松家・水野家に預けられ、元禄16年(1703)2月4日それぞれの家で切腹し、泉岳寺に葬られました。

この襲撃で浪士たちは義士という評価が高まり、その後、様々な文学・演劇・大衆芸能の上で多くの作品としてとり上げられました。

絵島・生島事件

江戸城大奥で起きた風俗素乱事件です。7代將軍徳川家継の生母月光院に仕えた女房の絵島・宮路らが、月光院の代参として増上寺・寛永寺に参詣、その帰途木挽町の山村長太夫座に寄り大奥の門限に遅れたことで取り調べを受け、嚴重に処罰されることになりました。

正徳4年(1714)1月12日、木挽町の山村長太夫座では美男の評判が高い生島新五郎の狂言が行われていました。そこに乗り込んできたのが増上寺の前將軍家宣廟へ代参を済ませた大奥の年寄絵島の一行でした。一行は棧敷や座元の居宅で遊興して大奥の門限に遅れてしまいました。

絵島らは同年2月2日に親類預けになり、さらに評定所で審理の結果、同年3月5日絵島は死一等を減じて永遠島に処せられました。評定所で示された判決文には、絵島は行状が悪く、御使い又は宿下りの際に貴賤を選ばないでよからぬ者に会い、ゆかりの無い家に泊り、中でも狂言座の者と馴れ親しみ、傍輩の女中を誘引し、遊び歩いたことなど重罪であるが、慈悲を持って命を助け永く遠流に処するとあります。しかし、同年3月12日、月光院の請願で内藤駿河守清枚へ預けられ、信濃伊那郡高遠へ配流されることになりました。

これに関連して生島新五郎が遠島(三宅島)、絵島の兄の白井平右衛門は死罪、弟の豊島平八郎は重追放など、事件に連座した人々は1,500人にのぼったといえます。

同年3月26日絵島の駕籠は内藤駿河守邸を出て高遠を目指しました。同じ日生島新五郎らに乗せた流人船が深川の越中島を出ていくこととなっていました。なお、絵島は高遠で過ごすこと27年、寛保元年(1741)4月に61歳で亡くなりました。その翌年生島新五郎は赦免されて江戸に帰りました。

事件の影響 山村座は取潰しとなりました。堺町、木挽町の劇場は、棧敷を2階・3階に造ること、棧敷から楽屋や座元の居宅への通路を造ること、棧敷を簾・幕・屏風で覆うことなどが禁止されました。また、屋根は堅固に作らず葺張りにし、営業も夕暮れに及ぶことが禁止されると共に、寺社境内の芝居・雑劇・猿楽の類も禁止されました。なお、享保3年(1718)に屋根・2階造りが許されました。

事件の背景 7代将軍家継の生母月光院は幼少の将軍を擁して、側用人間部詮房らと権勢を振るっていたといひます。これに対して大奥では、前将軍家宣の正室天英院を中心に強く反発していました。また、大奥の風紀が乱れ、利権を求める商人も介在していたといひます。

将軍継嗣 家継が正徳6年(1716)4月30日に亡くなりました。8代将軍には尾張家の徳川継友が間部詮房や新井白石らに支持されたといわれますが、結果として大奥や反間部・反白石の幕臣達の支持を得た紀州藩主の徳川吉宗が迎えられました。吉宗が将軍になってしばらくした後、天英院の父近衛基熙は日記に「公方(吉宗)慈悲あまねし、諸人武士数をつくして歓喜す。並びに天英院、陰徳日々に増長し、諸人之を感歎す。月光院事、奢りの子細言語に絶す。諸人の悪口する耳目に余りあり」と記しています。

大塩平八郎の乱

大坂で元東町奉行所与力の大塩平八郎が、幕政を批判して救民のために武装蜂起した事件です。

時期 天保8年(1837)2月～天保9年8月

社会背景 天保4年(1833)は冷害による凶作で、全国的に飢饉が起きました。米価は高騰し一揆などが多発しました。天保7年(1836)の大飢饉は、大坂市中にも餓死者が続出する惨状でしたが、大坂東町奉行の跡部山城守良弼は適切な救済策を取るどころか、飢えた市民が食用のため僅かなやみ米を持ち歩いたのを捕えて入牢させています。そして、米価は上昇し米屋の買い占めが米価上昇に拍車をかけました。さらに事態を悪化させたのが大坂町奉行に下った江戸廻米の指示でした。これは、幕府が11代将軍家斉の世子家慶の将軍宣下の式典に備えて大量の米を調達する必要が生じ、大坂町奉行所が兵庫湊で買米を行ったのです。

大塩平八郎 寛政5年(1793)～天保8年(1837)。大坂町奉行所の与力。先祖は駿河・遠江の守護今川氏の一族であったといひます。寛政5年(1793)1月22日天満四軒屋敷の与力邸に生まれ、幼くして父母を失い祖父に養育されました。13～4歳の頃から東町奉行所に見習いとして出仕して、38歳で退職するまで職務に精勤し名与力と謳われました。槍術に優れ学問も陽明学を修めて知己の頼山陽から「小陽明」と称せられています。自宅に洗心洞と名付ける学塾を開いて同僚の子弟や、近在の農民に学を講じました。

事件の経過 米価高騰で餓死者まで出始めた市中の情勢を大塩は看過できず、東町奉行跡部良弼に何度も窮民の救済策を上申しました。また、豪商には義捐金の拠出を募りました。しかし、跡部は上申書を見ても無視し、豪商も義捐金の拠出は消極的でした。こうした状況を鑑み、町奉行や豪商たちに天誅を加えて窮民を救おうと決意した大塩は、養子の格之助、与力瀬田濟之助、洗心洞の門弟たちと挙兵計画を練りました。また、蔵書1200部余を全て売り払って

換金し、天保8年（1837）の2月6日から8日にかけて市中や近在の窮民約1万人に金1朱づつ分配しました。これは拳兵の際、仲間に引き入れようという思惑も秘められていました。

始めの計画では2月19日に新任の西町奉行堀伊賀守が、東町奉行跡部山城守の案内で天満を巡視し、2人が申刻（午後4時）に大塩邸の向かいである朝岡助之丞宅で休憩することになっていたため、その時拳兵して両町奉行を倒し、ついで町々に火を放って豪商を襲い、米などを散じて窮民に分配するというものでした。

しかし、拳兵の前日密告者が出たため、予定を変更して直ちに決起することとし、19日の朝拳兵しました。自宅に火を放ち近在の農民もいち早く駆けつけたので、大塩方は100人程の勢力となり、「救民」の旗印を掲げて進撃し、大筒を手当たり次第に撃ったり、焙烙玉を投げたりして天満一帯を火の海にしながら正午ごろ船場に進出しました。この頃、両町奉行は鎮圧に乗り出し、烏合の衆であった大塩方は2度の小規模な砲撃戦を行っただけでその日の夕刻前には壊滅しました。市街地のほぼ5分の1が焼失し、焼けた家屋は3,400弱といます。平八郎親子は3月27日に市中鞆油掛町の町屋に潜伏していることが探知され、幕府役人に包囲されました。大塩父子は自ら火を放ち自害しました。天保9年（1838）8月幕府は大塩の遺体を磔にし、事件に関連した処罰者は800人以上になりました。

事件の影響 事件の噂はたちまち全国に伝播し、圧政に苦しんでいた民衆はより一層幕藩体制を批判するようになりました。そして「大塩残党」「大塩門弟」などの旗印をかかげた一揆・騒動が多発しました。

【参考文献】

- 『国史大辞典』1巻「赤穂事件」松島栄一 吉川弘文館 昭和55年
- 『国史大辞典』2巻「絵島・生島事件」児玉幸多、「大塩平八郎の乱」岡本良一 吉川弘文館 昭和55年
- 『国史大辞典』5巻「慶安事件」北原章男 吉川弘文館 昭和60年
- 『国史大辞典』7巻「島原の乱」中村質 吉川弘文館 昭和61年
- 『国史大辞典』13巻「益田時貞」煎本増夫、「丸橋忠弥」村井益男 吉川弘文館 平成4年
- 『国史大辞典』14巻「由比正雪」村井益男 吉川弘文館 平成5年
- 『日本の時代史』14巻「原城発掘」服部英雄 吉川弘文館 平成15年
- 『日本の歴史』17巻（改版） 奈良本辰也 中央公論新社 平成17年
- 『歴史人』no.54 KKベストセラーズ 平成27年3月

